

〔翻 訳〕

クレルヴォーのベルナルドウス

恩寵と自由意思 (続)

上野 正 二 訳

第九章

ベルナルドウスは、彼の語る三つの自由のうちに創造主の似像と類似が含まれていることを示す

(二八) しかし、私はこの三つの自由のうちに我々がそれに向けて造られている創造主の似像 (imago) そのものと類似 (similitudo) が含まれており、似像は意思の自由において、残りの二つの自由においてある種の二重の類似がしるしづけられる (consignari) と思う。ここからして、自由意思のみはその欠陥 (defectus) あるいは減少を全く被っていないということになる。なぜなら、それ自身のうちに、特に永遠にして不可変な神性のある実体的似像が刻印されているのがわかるであろうから。ベルナルドウスは自由意思を永遠性に似たものだと言う

というのも、自由意思はたとえ始まりを持つていても消滅を知らず、また正義や栄光によって増加すること、罪や悲惨によって損害 (detrimentum) を受けることもないからである。永遠性ではない何が永遠性により類似しているであろうか。さらに他の二つの自由においては、単に部分的に減少され得るばかりでなく全体的にも失われ得るのであるから、神的智慧と力のある種のより一層付帯的な類似が、似像に付加されたものとして、認められる。要するに、我々はそれらの自由を罪によって失い、恩寵によって取り戻したのである。そうして毎日、我々

は或る者たちはより多く、或る者たちはより少なく、自分自身において前進し、あるいは自分自身から離れる。それはもはや取り戻すことが出来ないような仕方でも失われ得るし、どのようにも失われも減少されもしないような仕方でも確保されることも可能である。

(二九) 人間は樂園においてたしかに、この神の智慧と力の二重の類似の最高の段階においてではなかったが、それにより近いものとして造られている。というのも、人間がたしかにそのように作られている罪を犯さないでいる可能性、不安にされない可能性 (posse) よりも、何が罪を犯すことの不可能性、不安にされることの不可能性に——たしかに聖天使たちはすでにこの状態にあり、また神は常にそうであることは疑い得ないのだが——より近いであろうか。その状態から罪によって彼 (アダム) が墮ち、否、彼において彼と共に我々が墮ちることによって、我々は恩寵によって再び——アダムをではないが、アダムのためにより劣った地位・段階 (gradum) を受け取ったのである。というのも、我々はこのでは完全に罪あるいは悲惨なしには存在し得ないからである。だが我々は恩寵が援けてくれるならば、罪によっても悲惨によっても打ち勝たれ得ない。だが一方、聖書は言う。「神から生まれた者はすべて罪を犯さない」(一ヨハ三・九)と。しかしこれが言われたのは(永遠の)生命に予定された者たちに関してであって、それも彼らが全く罪を犯さないということではなく、罪が彼らに帰せられないということであり、この罪はあるいはそれに値する悔悛によって懲らしめられ、あるいは愛の内に隠されるのである。じつさい「愛は多くの罪を覆い隠す」(一ペト四・八)と言われ、また「その不正を許され、その罪が覆われた者たちは幸いである」(詩三二・一)と言われ、「主が罪を帰せしめない人は幸いである」(詩三二・二)と言われるのである。

ベルナルドウスは、理性的被造物の段階を美しく識別する

それゆえに最高の天使たちは神的な類似の最高の段階を占め、我々は最低の段階を占めるのである。アダムは中間の段階を占めたのであり、さらに悪魔たちはどの段階も占め得ない。たしかにより優れた霊たちには、罪と悲惨なく強固に生き続けることが与えられたが、アダムにはたしかに罪と悲惨なしに存在することが与えられたものの、永続することは与えられなかった。だが我々にはこれらなしにあることは与えられなかったが、ただそれら自体に服従しないことは与えられたのである。また悪魔とその仲間たちは、罪に逆らおうとは決して欲しないのだが、それと同様に、罪の罰を避けることも決して出来ないのである。

ベルナルドウスは自由思慮と自由喜悅を（神の）類似に、自由意思を似像に關係すると見做す

（三〇）それゆえ、あの二つの自由、すなわち思慮の自由と喜悅の自由は、それによって理性的被造物に眞の智慧と権能が呈せられるのだが、神が欲するとおりに配分し給うことにより、地上ではわずかに（modice）天の上では完全に（plenarie）樂園ではほどよく（modiciter）所有されるが、地獄では全く持たれないという具合に、各々の原因、場所、時に応じて変えられるのであるが、意思の自由はそこへと向けて創られた状態そのものからほとんど変わらず、天においても地においても地獄においても、それ自体にあるかぎり（quantum in se est）常に等しく所有されるので、当然ながら前者は類似に、後者は似像に關すると見なされるのである。そしてたしかに、地獄においては両方の自由、すなわち類似に關わりと言われる自由は滅びていることを、聖書の権威が証明する。というのも、そこでは特に思慮の自由について理解される眞なる知は、全く存在しないことを、次のように読まれる箇所が明示している。すなわち「お前の手がただちになすことの出来ることは何であれ、お前が急ぎ行く地獄では働いても理性でも智慧でもないのだから——」（コヘ九・一〇）と。

さらに自由喜悅によって与えられる権能についても、福音書は次のように言う。「手と足を縛つて、彼を外の闇に放り出せ」（マタ二二・一三）と。手と足を縛るとは、力をあらゆる仕方に取り去ることではなくて何であらうか。

悪しき意志は罰せられることを欲しないことによって、当然のことながら、責め苦のうちに存続し続けること

（三一）しかしある者は次のように言う。「堪え忍ばれる諸悪が為された諸悪を悔悟するように強いる処には、どうしてある種の知（sapere）が存在しないであらうか。いったい責め苦の中にいて人が悔悛しないことが可能であらうか。あるいは悪を悔悟することが知でないことが可能であらうか」。この言い分は、もし罪の行いのみが罰せられ、悪しき意志は罰せられないのであれば、正しく異論を述べたことになる。なぜなら、責め苦のうちにおかれた者は誰も、罪の行いをくり返すことを樂しまないことは疑いないからである。しかしながら、もし意志が責め苦の中においても悪しきものであり続けるならば、（罪の）行いを拒否することは、いかなる重みを持つであらうか。——たとえばある人が、今や熱火の中において放蕩することを喜ばないがゆえに、知っているとかわれるとしても。要するに、「智慧は悪意の魂には入らない」（知一・四）のである。だが我々はどうして悪しき意志は罰の中でも存続すると判断するであらうか。たしかに、他のことは無視するとして、彼らは懲罰されることを全く欲しない。しかるに罰せられるべきことを行つた者が罰せられるのは正しい。それゆえに彼らは正しいことを欲しないのである。しかるに、正しいことを欲しない者は、彼の意志は正しい意志ではない。それゆえに、この意志は正義と調和しないことによって不正であり、またそのことによって悪しき意志である。不正な意志を証しする理由は二つある。罪を犯すことを喜ぶからであるか、罪を犯して罰せられずにい

ることを喜ぶからである。したがって、罪を犯すことが出来た間だけ、罪を犯すことを喜んだし、それが出来なくなつた今、罪を犯したことを罰せられずにいることを欲する者たちに、このことではいかなる真なる知恵、いかなる善き意志が明らかになるであろうか。だが彼が罪を犯したことを悔いているとせよ。もし選択が許されるなら、彼は罪の罰を耐え忍ぶよりはむしろな罪を犯すことを選ぶのではないだろうか。だが罪を犯すのは不正であり、罪の罰を耐え忍ぶのは正しい。だが、善き意志はいつ、正しいことよりも不正なことを選んだりするであろうか。たしかに、自ら自分自身のために生きたことの方を、そのことがいま出来ないうことよりもむしろ苦しまない人間は、真に悔悛していいのである。要するに内で何が行われているかが、外で示されるのだ。実際、肉体が熱火の中で生きている限りは、意志が悪意のうちに留まることは確定している。したがって、似像は地獄にも自由意思によって不可変的に永続しているのであるが、思慮の自由と喜悦の自由のうちに含まれている類似については、地獄には全く存在しないし存在し得ないのである。

第十章

(三二)だが、この世においても、どこにも神の類似は見いだされ得ない。だが、もし福音書のあの女がランプに火を灯し(ルカ一五・八)(すなわち智恵が肉に現れ)、家を(ということは悪徳を)掃除し、自分の無くしたドラクマを探し(ということはすなわち埃の中に隠れていたかのように本来の飾りを奪われ、罪の毛皮の下で薄汚くしていた自分の似像を探し)、それを見出して拭き取り、また非類似の領域から引き上げ、太古の姿に再形成して聖なる人々の栄光にあるかの類似とし、否、ある時あらゆるものによって自分自身にふさわしいものとして再現したのでなければ、なおここにはみにくい醜惡な類似が横たわっていたであろう。

ここに「ある時」というのは、すなわち聖書のあのことが成就される時である。すなわち「(キリストが)現れるとき、我々は彼に似たものとなることを知っている。なぜなら、彼をありのままに見るからである」(一ヨハ三・二)。まことにこの行いは神の御子以外の誰によりふさわしかったであろうか。彼は父の実体の光輝であり形であつたので、全てを言葉によって携えて(ヘブ一・三)両者(光輝、形)によって容易に守られたものとして現れたのであつた。彼はそれゆえに、形を損なつたもの(deformis)を再形成し、それゆえに不具の者(debilis)を強め、また形の輝きによって罪の暗闇を追い散らしながら、智恵を回復させ、言葉の力によって悪魔の支配に反対して力あるものとしようとするのである。

(三三)それゆえ形相そのものが来たのであり、自由意思はこの形相に向けて形作られねばならなかつた(conformandum)のである。なぜなら、自由意思は太初(初)の形を受け取るために、初めにはそれによって形づけられていたかの形相によって再形成さるべきであつたからである。この形相とは智恵である。形づけ(conformatio)とは、形相が世界において行うことを似像が身体において行うといったことである。さらにその智恵は「世の果てから果てまで力強く関わり、力を及ぼし、快く全てを配置する」(知八・一)。果てから果てまで関わりとは、至高天から地の最下部までであり、最高の天使から最低の虫までである。力強く関わりとは、可動的に動き回ることや場所的に広がることによらず、また従属的被造物の単なる職務的管理によらず、何らか実体的なまたどこにも現在する強さによるのであり、この強さによって智恵は全てを最も力強く動かし、秩序付け管理するのである。またいかなる智恵もこれら全てを必然性によって行うようにと強制されない。というのも智恵はこれらのことを行う際に困難を伴つて苦勞することはなく、全てを柔和な意志に

よって快く配置するからである。あるいはまた、たしかに果てから果てへ関わるのであるが、それは被造物の出現から創造主によって定められた終わりまでであって、この終わりはあるいは自然本性が追い立てるか、あるいは原因が急がせるか、恩寵が許し与えるかのいずれかである。力強く関わるのは、智慧が欲するところに従って力強い摂理によって予定すること以外は、これらのことは何も生じないからである。

(三四) それゆえに、智慧が世界を管理する (*praeum esse*) ように、自由意思も、自分も果てから果てまで力強く関わりながら、自らの身体を管理するよう努めねばならぬ。ということとはすなわち、罪が自分の死の体を支配することを許さず、また自らの肢体を武器として不義に与えず、義に仕えさせるほどに、個々の感覚や四肢を力強く支配しながらである。このようにすれば、罪を犯さないのであるから、もはや人間は罪の奴隷ではなくなるだろう。自らの内にある神の似像に全くふさわしい類似を着るのであるから、否、古の優美さを再び手に入れるのであるから、たしかに罪から解放されて思慮の自由を回復し始め、今や自分の尊厳を我がものとし始めるだろう。だが、自由意思はこれらのことを力強く、またそれに劣らず快く行うよう注意しなければならぬ。ということには悲しみや必然性によってではなく——なぜならこれは智慧の満ち溢れではなく、始まりだから——、準備のできた活気のある意志によって——なぜなら「神は快い施与者を喜ぶ」(二コリ九・七)のであるから、これは犠牲を好ましいものにするから——行うということである。このようにして自由意思は悪徳に力強く抵抗し、良心のうちに心地よく安らうならば、すべてに智慧を模倣するであろう。

(三五) たしかに我々はその模倣によってこのようなことどもへ向けて呼び出されるのだが、その智慧の助けをも、我々は必要としている。すなわち我々自身は智慧の助けによって智慧へと形作られねばならず、ま

たあたかも主の霊によってのように明らかから明らかへと同一の似像に向けて変形されなければならない。それゆえもし主の霊によるのならば、もはや自由意思によらない。それゆえに、誰も力と容易さをもって善と悪の間を等しく転がされるために自由意思と言われたとは考えないであろう。実際、自分自身によって墮ちることは出来たが、主の霊によらねば再び立ち上がることは出来なかったのであるから。そうでなければ、神も聖天使たちも、悪しき者ではあり得ない仕方であるので、また反対に叛逆者たる天使たちはもはや善き者であり得ない仕方である。だが我々もまた、たしかにある者たちは善き者たちと、ある者たちは悪しき者たちと混じり合っているであろう復活の後には、自由意思を失うであろう。

神も悪魔も自由意思を欠くことがないこと

しかもなお、神も悪魔も自由意思を欠いてはいないのであって、それというのも神が悪しき者たり得ないのは、弱い必然性の仕業ではなく、善における固い意志の仕業であるからである。また悪魔が善へと蘇生し得ないのは、外からの暴力的な圧力のなすことではなく、悪魔自身の悪における頑固な意志もしくは意志的な頑固さのなすことであるからである。それゆえに、今や善人においてであれ悪人においてであれ、等しく自由な意志を作り上げることからしてむしろ自由意思と言われるのである。欲する者でなければ誰も善き人だともまた悪しき人だとも呼ばれるべきではなく、またそんなものであり得ないのであるから。このような理由によって、それが善と悪に同等の仕方に関与していると言われて不適当ではないのである。すなわち両方の場合に、選択における容易さは等しくないが、意志における自由が自由意思には等しいからである。

第十一章

(三六) たしかに、先に述べたように、この神的尊厳の特権によって、創造主は特別に理性的被造物を印づけられた。なぜなら、創造主自身が自分の権能 (Eis) に属するものであり、彼が善き者であったことは、彼自身の意志に属するものであり必然性に属するものではなかったように、理性的被造物も——ただ自分の意志によってのみ、あるいは悪しきものとなり正当にも断罪され、あるいは善きものとしてとどまり、当然のこととして救われるのである限り——自らのある権能に属するものとしてこの部分 (つまり意志) に存在したのであるからである。それは、彼 (理性的被造物) にとつて自分の固有の意志が救いに充分であり得るからではなく、その意志なくしては救いに至ることが決してないからである。たしかに誰もいやいやながら救われる者はいない。

神はその意志があると認めたものでなければ、救いにふさわしいと判断し給わないこと

というのも、福音書に「私の父が引き寄せて下さらなければ、誰も私に来ることはできない」(ヨハ六・四四)と、また別の箇所「人を無理やりに入れなさい」(ルカ一四・二三)と言われていることは、何も妨げないのである。なぜなら、すべての者が救われることを欲している恵み深い神がいかに強く救いに向かつて引き寄せ、強制するように見えようとも、彼が前もってその意志があると認めない者は誰も救いに値するとは判断しないからである。つまり、脅したり突ついたりするときに、神の意図し給うのは、救いを欲しない者は救わないということではなく、意志ある者に対することである。神が(人間の)意志を悪から善へと動かすときには、いかに移しても自由を取り去ることはないのであるから。だが他方。我々が(神に)引き寄せられるのはいつも意に反してであるのではない。盲人や疲れた者は手を引かれる時、悲しまされ

るのではない。パウロもダマスコへ手を引かれて行った(使九・八)が、たしかに意に反してではなかった。『雅歌』で、このこと自体を大いに切望していた女性は、要するに、霊的に引きよせられることを欲していたのである。そこには「私をあなたの後に引き従わせて下さい。あなたの香油の香りの中へと私たちは走りゆきます」と書かれている。

(三七) 次にこれに相対して書かれていること、すなわち「各人は自分の欲求に引き裂かれ誘惑されて試みられる」(ヤコ一・一四)や、「朽ちる肉体は魂を重くし、地上の嗣業は多く思い煩う気分を圧迫する」(知九・一五)や、同様に使徒の「私の肢体には別の法則があり、心の法則に対して戦いを挑み、そして肢体に存在する罪の法則の中に私をとりこにしているのを見る」(ロマ七・二三)と書かれていることに關し、これらの全ては意志を強制し自由を剝奪していると考えられ得る。だが、ある人がいかにほどの誘惑によって内から外から無理押しされようとも、意思決定に直面している限り、本当に常に自由な意志であろう。たしかに、それにもかかわらず、自分の同意からして自由に判断するであろう。しかしながら思慮あるいは喜悦に関する限りは、肉の欲求と生の悲惨が逆らうために、たしかに自らを自由であると感ずることは少ない。しかし悪に同意しない限りは、たしかに悪しき意志であるとは感じないのである。

自らが罪の法則のうちに引き寄せられることを嘆く使徒の考え

要するに、自らが囚われ人として罪の法則へと引き寄せられることを嘆くパウロは、思慮の自由が十全でないことには全く疑いをもたず、健全で、善においてもまったく自由な同意を有していることを誇るのである。彼は言う、「もはや私がそれをしていないのか。彼は言う、(ロマ七・二〇)と。パウロよ、どうしてこのことを確信するのか。彼は言う、「それが善きものであるから私は神の法則に同意する」(ロマ七・一六)

からである。さらに、「というのも内なる人に従つて私は神の法を喜んでいる」(ロマ七・二三)からである。目が澄んでいれば全身が明るい(マタ六・二三)と彼は推測する。同意が健全であれば、たとえ罪に引き寄せられ、あるいは悲惨にとらえられても、自分は善において自由であると告白するのを彼はためらわない。そこから彼は確信を持つて一般的に推論する。「それゆえに、キリスト・イエスにある者たちには何の斷罪もない」(ロマ八・一)と。

第十二章

(三八) だが我々は罪と死との怖れから信仰を言葉上は否定するよう強制された人々について考えるべきであろう。彼らの強制されての言表によつては、あるいは声の上でのみ否定したのであるから罪ではなかったのか、あるいは、意志もまた罪へと強制され得たのであり、その結果、人が欲しないと決心していたことを欲するようになり、こうしてまた自由意思が減じたのではないかと。後者であることは不可能であつたから——というのも、同じものを同時に欲しかつ欲しないということは不可能であつたから——悪を決して欲しなかつた人にどうして悪が歸されねばならなかつたかが問われる。というのも、これは原罪のようなものではない。原罪の場合、洗礼によつて再生していない者は、単にそれに同意しないだけではなく、たいていはそれを知らないのに、ある仕方で縛り付けられている。たとえば、使徒ペテロを法廷に立たせよう。彼自身はたしかに自分の意志に反して真理を否定するのを見られた(マタ二六・七〇)。まことに、否定するか死ぬかのいずれかが必然であつたからである。彼は死ぬのを怖れて、否定した。彼は否定することを欲していなかつたが、死ぬことをそれ以上に欲しなかつた。したがつて、たしかに意に反してだが、死なないために否定したのである。だがもし人が、

意志によらずに舌の上だけで自分の欲していなかつたことを語るように強制されたが、彼が欲していたことは別のことを欲するように強制されたのではないならば、舌が意志に反して動かされたのである。それではいったい、意志は変えられたのだろうか。けだし彼はなにを欲していたのか。彼がそれであつたこと、すなわちキリストの弟子であることを。彼が語つたのは何であつたか。「私はその人を知らない」(マタ二六・七)であつた。なぜそう言つたのか。死を避けようと欲していたからである。だがこれはいかなる罪であつたのか。

死ぬことよりもいつわること欲したペテロの意志は罪がある、とベルナルドウスは言う

我々は使徒ペテロの二つの意志を持つている。一つは死ぬことを欲しなかつた意志であり、全く罪のないものである。もうひとつは大いにほめらるべき意志であり、キリスト者であることを喜ぶ意志である。ではどの点で彼は罪ある者とされるのか。死ぬことよりもいつわらんと欲したという点においてか。靈魂の生命よりも肉の生命を保持しようと欲したこの意志は、明らかに非難に値するものであつた。「たしかにいつわる口は魂を滅ぼす」(知一・一一)。またそれゆえに、罪を犯したのであり、自分の意志の同意なしにはなかつた。この意志は弱く悲惨ではあつたが、充分に自由であつたのだ。だが、彼は罪を犯したが、それはキリストを遠ざけたり憎んだりすることによつてではなく、自分を過度に愛することによつてである。かの突然の恐怖は彼の意志をこの邪な自己愛へと驅り立てたのではなく、自己愛の存在することを実証したのである。彼が隠れていることは不可能であつたあの方から「鶏が鳴く前にお前は三度私を否認する」(マタ二六・三四)と聞いたときに、ペテロはすでにそういう人間であつたが、そのことを知らなかつたのである。こうしてあの意志の弱さは突然の恐怖によつて、生じたのではなく、(存

在しているのが）知られたのであり、どれだけ自分を、どれだけキリストを愛していたかを知らしめたのである。ただし、キリストに知らしめたのではなく、ペテロにである。というのも、キリストはその前にも「人の心のうちにあることを知っておられた」（ヨハ二・二五）のであるから。それゆえにキリストを愛していた限りでは、かの意志は、たしかに——このことは否定さるべきではない——自らに反して（知らないと言おうようにと力を被ったのである。だが自分を愛していた限りでは、自分のためにそう言うようにと、疑いなく意志的に同意したのである。もしキリストを愛さなかったならば、意に反して否認することはなかっただろう。だがもし自分をそれ以上に愛することがなかったならば、彼は決して否認しなかっただろう。こうして、ひとが自分の意志を、たとえ変えるようにとはなくとも、隠すようにと強いられたことは認めねばならない。「強いられた」と私が言うのは、神の愛から遠ざかることをではなく、自己愛から少し後退することを、強いられたのである。

（三九）それでどうなのか。おそらく、意志が強制され得たことがたしかに見出されたので、これまでの意志の自由についての主張は全部ご破算になったのか？完全にそうである。が、それは（意志が）自分自身以外のものによって強制され得たならば、のほなしである。だがもし意志自身が自分を強制したのであれば、意志は強いられながら強いるのであって、意志が自由を無効にするのが見られたそのところで、意志が自由を受け取ったことがはっきりしたのである。じつさい、意志が自分に向かって引き起こした強制力を、自分によって被ったのである。

ベルナルドウスは、ペテロは強制されて自分の意志に同意したのではなく、厳密には死ぬことを怖れたあの意志に同意したのだ、と言う

さらに、意志が自分によって被ったことは、意志によってであった。意志によってあったことは、すでに必然性によってではなく、意志的な

ものであった。だが意志的であるならば自由でもある。要するに、自分の意志に否定するように強いられた者は、欲したのであるから、強いられたのである。否。強制されたのではなく、同意したのである。それも他の力ではなく、自分の意志に——たしかに死を何としてでも避けようと欲したあの意志に、同意したのである。そうでなければ、もし舌の主人である意志が承認しなかったならば、どうして女中の声がペテロの聖なる舌を不信心な言葉へと形成しようとした（マコ一四・六六）であろうか。要するに、間もなく彼が自分のものへのあの過度の愛から自己を節制し、またキリストを、そうすべき仕方で心をつくし、魂を尽くし、力を尽くして愛し始めた時（マコ一二・三〇）、もはやいかなる脅迫によっても責め苦によっても、舌を不義の武器として意志に与えることが強要されることは出来なかったものであり、むしろ大胆に真理に身を委ねて言ったのだ。「人間たちによりも神に従わなければならない」（使五・二九）と。

自由意思に対する、受動的、能動的の二重の強制について

（四〇）たしかに、何かを被るように強制されるか、あるいは自分の意志に反して行うように強制されるかにしたがって、二重の強制（compulsio）がある。そのうちの受動的な強制——前者はこのように呼ばれて正しいのだが——は、時としてそれを被る者の意志的同意なくしてなされ得る。だが能動的強制は決してそうではない。それゆえ、我々のうちで、あるいは我々に関して（de nobis）生じる悪が、もし意に反したものであれば、我々には責任を帰せられない。我々によっても生じるその他の悪は、すでに意志の罪なしには存しない。もし我々が欲していなければ生じていなかったのであるから、意志が明らかに確証される。それゆえに、それはある種の能動的な強制である。だが意志的でもあるのだから、言い逃れは出来ない。キリスト者がキリストを否認するよう

強制されていた——この場合、たしかに苦痛を感じながらだが、意志することなしにはない。彼は殺そうとする者の武器を過度に避けようと欲していたし、また彼の外に現れていた (apparebat) 武器ではなく、彼のそのような内面で意志を支配していた意志が、(否認するように) 口を開かせていた (aperiebat) のであった。さらに言えば、武器は彼の意志がそのようであることを確証してはいたが、強制してはいなかった。要するに、健全な意志を持っていた者なら、殺されることが出来たし、屈服させられ得なかったのである。彼に対して予告されていたことはこうである。「彼らは欲したことを汝らに対して行う」(マコ九・一三参照)。ただし、それは心ではなく、肢体に対してである。彼らが欲したことは、あなた方は行わないで、彼らが行うのだ。あなた方は被るのだ。彼らは肢体を責め苛むであろうが、意志を変えることはない。彼らは肉体に対して荒れ狂うが、魂に対してはなすべきことを持たないのだ。もし力を被る者の肉体が苦しめる者の権能のうちにあるとしても、意志は自由なのである。彼の意志が弱かったならば、彼らは荒れ苦しめることによってそれを知らう。もし弱くなかったならば、彼らは意志が弱くあるようにとこれから強制することはない。たしかに彼の弱さは、自分自身によってそうなのである。健全さは自身によってではなく、主の霊によってである。だが、健全にされるのは新しくされる時である。

(四一) ところが、新しくされるのは、使徒が教えているように「神の栄光を見ることによって、あたかも主の霊によるように、神の似像に向かって栄光から栄光へと——これはつまり徳から徳へとということだが——変えられる」(二コリ三・一八) 時である。

肉と霊の中間者が自由意思である

とにかく、ある種の神的な霊と肉の欲求の間で、中間の場所を人間のうちに自由意思、すなわち人間的意志と呼ばれるものが保持している。

そしてあたかも山の急斜面におけるように、まさに高峻な場所の上下いずれにも動けずに、欲求において肉によって弱くされて、結局聖霊が恩寵によってその弱さを熱心に援けなければ、徳から徳へと上昇することによって正義——それは預言者によれば神の山のようなものだが——の頂上を占めることは出来ないだけでなく、またつねに悪徳から悪徳へと自分自身の重みで転がされて——というのは、むしろ単に始原的に肢体の中に植え付けられた罪の法則によってだけでなく、日常的に情念に深く根ざした地上の嗣業の慣習によっても重荷を負わされてだが——深淵へと沈み込むことになる。この人間の意志の両方の重荷・損傷について、聖書は一つの短詩によって手短に触れている。曰く「朽ちる体は魂を重くし、地上の嗣業は多く思い煩う気分を圧迫する」(知九・一五)と。そしてこの可死性に関する二つの悪は、同意しない者を害しはしないが、同意する者を弁護せず、断罪するという仕方で訓育するのである。それは救いと断罪が先行する意志の同意なしにはいかなる仕方においても持たれ得ないように、また意思の自由に対しては、いかなる側面からも指図がなされると思われないうようにするためである。

第十三章

(四二) それゆえに、被造物のうちで自由意思と言われるものは、いかなる外的な力によっても罪を犯すようにと予定されるのではないから、たしかに断罪されるのが正しいか、あるいは自分の力が義とされるには充分でない者には、憐れみによって救われるかのいずれかである。もちろん、これら全ての論において、原罪の論理が全く除外されていることを、読者は熟考されたい。その他のことについては、自由意思にはそれ自体の外に断罪の原因が求められるべきではないし——なぜならそのもの自身の罪によるのでなければ断罪しないからだ——また自由意思自体

に救いのための功績が求められるべきではない——なぜなら憐れみのみが救うのだから。じつさい自由意思の善に向かう努力も、恩寵に助けられなければ空しいし、また恩寵に促されなければ存在しない。それのみではなく、聖書の言うところでは、人間の考えと思念は悪へと傾いている（創八・二一）。それゆえに、功績は、もしそれによって永遠の救いが得られる功績そのものが最上の贈り物、完全な賜物のうちにあると判断されるべきであるならば、すでに述べたように、自由意思にそれ自身によって生じるのではなく、むしろ上から、つまり光の父から下つてくると考えるべきである。

神はその賜物を功績と報酬に分けること

（四三）たしかに、我々の王である神は、世々の昔から地上のただ中で救いを行ったとき（詩七四・一二）人間に与えた賜物を功績と報酬（*premia*）に分けたのである。現にある賜物が自由な所有によって我々の功績となり、未来の賜物を無報酬の契約によって我々が待ち望むため、否、負債として要求するためにである。その両方を思い出させながら、パウロは言う、「あなた方は聖化（*sanctificatio*）に至る実を結んでいる。その終りは永遠の生命である」（ロマ六・二）と。同じく「そして私たち自身、霊の初穂を持ちながら呻き、神の子らの身分を受けることを待ち望んでいる」（ロマ八・二三）と。霊の初穂と呼んでいるのは聖化、すなわち諸徳であって、それによって我々は現にある賜物において聖霊によって聖化され、その功により当然に子の身分を手に入れるに至るのである。さらに福音書の「彼は百倍を受け、永遠の生命を受ける」（マタイ一九・二九）と言われているところで、この世を放棄した人に、その放棄したものと同じものが約束される。したがって、救いは自由意思のことではなく、主に属することである。否、主自身が救いであり、主自身が救いへの道でもあり、その方が「私が民の救いである」（詩三五・三）

と言ひ、この方が同じく「私は道である」（ヨハ一四・六）と語っているのである。救いであり生命であつた方が、自らを道とし給うたが、それはすべての肉が誇らないためである（一コリ一・二九）。それゆえにもし、救いと生命が祖国における善であるように、功績が道における善であるならば、またダビデが「善をなす者はいない。一人に至るまでは」（詩一四・三）——この一人とは、それについて同じく「神ひとり以外に善き者はいない」（ルカ一八・一九）と言われている方である——と言うことが真であるならば、疑いもなく我々の働きも神の報酬も神の贈り物・職務（*munera*）であり、またそれらの職務において自らを債務者とした方はまた、我々をこれらの行為から賞を受ける者とし給うた。だが彼は、人間にこの功績を立てさせるために、人間たちの任務を利用することに決める。それは神が彼らが必要とするのではなく、こうすることによって彼らに、あるいは彼らに関して、役に立てるためである。神の三つの働き、すなわち第一は「それを通してそれなしに」、第二は「それに反して」、第三は「それと共に」働く三つの働きについて

（四四）それゆえ、神は命の書に名前が記されている者たちの救いを（ピリ四・三）、ある時は被造物を通して被造物なしに、ある時には被造物を通して被造物に反して、ある時には被造物を通して被造物と共に、行うのである。たしかに多くのものが無感覚なもしくは非理性的な被造物を通して——これらを私はそれゆえに「それなしに生じる」と言ったのである、なぜなら、それは知性を持たないので意識的ではあり得ないからである——人間のために有益なものになる。また神は多数の者の救いに有用な多くのことを、悪しき人間あるいは悪しき天使を通してなす。しかし彼らは意に反して（*inivus*）であるので「彼ら自身に反して」なのである。というのも、彼らが害しようとして助ける場合には、有用な働きが他の人たちに効果があるだけそれだけ、彼らの転倒した意図は、

自分自身を害するのであるから。さらに、その人たちを通してその人たちと共に、神が働き給う善き天使あるいは善き人間がいる。彼らは神が意志したことを一緒にに行い、また欲するのである。というのも、自らが働きによって成就する善に意志によって同意する者たちを、神は彼らを通して神が展開される働きに参与させる。そこでパウロは、神が彼を通して為し給うた多くの善を詳述した際、「だが私ではなく、神の恩寵が私と共に(行った)」(二コリ一五・一〇)と言ったのである。彼は「私を通して」と言うことも出来たが、その言葉では不足だったので「私と共に」と言うことをむしろ欲したのである。自らが単に実行することによって働きの奉仕者であるとはかり考えるのでなく、同意することによって働きの仲間であると考えながら。

(四五) 先に述べた神の三つの働きに即して、各々の被造物は自分の任務の報酬として何を相応しいものとして得る(*merced*)かを見てゆこう。そして「それを通してそれなくして」成るものが成る被造物は、何を得ることが出来るのか。「それに反して」成るその被造物は(神の)怒り以外の何を得るのだろうか。また「それと共に」成るその被造物は恩寵以外の何を得るであろうか。

各々の被造物がふさわしいものとして得るのは何か

じつさい、第一の被造物においては何の功績も得られず、第二の被造物においては悪しき功績が、最後の被造物では善き功績が得られるのである。というのも、畜獣たちは、彼らを通して善悪何れかが生じるとき、善あるいは悪に値するものとなることはない。なぜなら、彼らは善悪に同意する方途を持たないのであるから。まして石の場合は、感覚しないのであるからおさらである。他方、悪魔あるいは悪しき人間は理性によって生きており、配慮しているのであるから、たしかに善悪に値するのだが、しかし善に対立しているために、罪にのみ値するのである。し

かし欲して福音を宣傳伝えるパウロは、いやいやながらすることによって義務的割り当て(*dispensatio*)のみが彼に託されることのないようにそうしたのであり、またパウロと同じような仕方を知っている人は誰であれ、意志の同意からして服従するのであるから、義の冠が自分に用意されていると固く信じているのである。それ故、神は彼らの救いに向けて、仕事が完成したならばどこにも存在しなくなる役畜や道具のように、非理性的な被造物や非感覺的な被造物を使用するのである。神は、理性的ではあるが悪意の被造物を、子供を叱ったならばもはや無用な枝として火に投げ込む鞭として使用する。天使と善き意志の人間は戦友や補佐人として使用し、勝利が完遂されたならば、彼らに最高の仕方では報いるのである。結局パウロも自分および自分に似たものについて大胆に布告している。「けだし我々は神の補佐人である」(一コリ三・九)と。それゆえ神は人間を通して人間自身と共に何か善きことをふさわしい仕方で行おうと決めたところでは、人に功績を気前よく用意しているのである。こうして実際、我々は意志的同意によって神の意志に結びつけられるのであるから、我々は神の補佐人、聖霊の共働者、御国の功労者であると考えるのである。

第十四章

(四六) それで、どうなのか。自由意思が同意することの全体が、自由意思の働きであり、そのみが自由意思の功績であるのか。たしかにそうである。だがそれは、(全て功績は同意において成り立つのだが)その同意自体すら、それ自体によって成り立つからというのではない。それというのも、同意することよりも小さなことである思惟すること(*cogitare*)もまた、我々が我々自身から(*ex nobis*)なし得るというような意味で、何らか我々自身から(*a nobis*)成り立つのではないの

であるから。

善き思惟は神からであり、同意と働きは同じ神からだが、我々なしには存在しないということ

これらの言葉は、私のものではなく、使徒のものである。パウロは善に属するものであり得る全て、すなわち善き意志によって思惟し、欲し、遂行することを、自分の意思ではなく神に帰している(ピリ二・一三)。それゆえ、もし神がこれらの三つ、すなわち善を思惟し、欲し、遂行することの三つを我々のうちでなし給うならば、たしかに最初のことは我々なしに、第二のことを我々と共に、第三のことは我々を通してなし給う。実際、先ず善き思惟を送り込むことによって、神は我々に先行し、悪しき意志を変えらるることによって、我々を同意を通して自らに結びつけ、同意に能力と容易さを与えることによって、神は外部で我々の開かれた活動を通して、内的な形成者として知られるのであるからである。もちろん我々自身が我々に先行することは決してあり得ない。だが、誰をも善き者として見出さない方は、それは彼が先行しないからだだが、誰をも救い給わない。それゆえ、疑いもなく神によって、我々の救いの始まりが生じるのであって、我々を通してでも、我々と共にでもない。しかし同意と働きは、たとえ我々からではなくても、すでに我々なしではあり得ないのである。

善き意志なしには、同意も働きも成就しない

したがって、じつさい我々がそこでは何もなさない第一のことも、無用な恐怖あるいは断罪さるべき欺瞞が概して奪い去ってしまう最後のことも、我々には功績と勘定されず、中間のことだけが(功績として)勘定されるのである。すなわち、時としては善き意志のみで充分なのであって、もし善い意志一つが欠けるならば、他のものは役に立たない。「役に立たない」と私は言ったのだが、行為する者に役に立たないのであ

て、認識する者にはない。したがって、意図は功績に向けて役に立ち、行為は範例に、両者に先行する思惟は、ただそれら呼び起こすことに役立つだけである。

(四七) それゆえに、これらのことが目に見えぬ仕方では我々の内で、また我々と共に行われているのに気づくときには、それらを弱いものである我々の意志に帰したり、ありもせぬ神の必然性に帰したりせず、ただそれだけで充分である恩寵にのみ帰するように注意しなければならない。恩寵そのものが、思考の種蒔きをする時に、自由意思を呼び起こすのであり、情動を変えるときに癒すのであり、行為へともたらすために(意思を)強めるのであり、欠如(defectus)を感知しなくすむように意思を保護するのである。しかし、恩寵は結局ただ最初のみ意思に先行し、他の場合には、以後は引き続き自らに共働するようにと(自由意思に)先行することによって、同伴するという仕方では、自由意思と共に働くのである。だが恩寵のみによって始められたことが、両者によって等しく完成されるのだが、それは、両者が個々バラバラにはなく、混合して、交互にはなく同時に、個々の前進を通じて働くのである。一部に恩寵がまた一部に自由意思が、というのではなく、一体として個々のことがらを分かちがたい働きによって完遂するのである。自由意思が全体を、また恩寵が全体を行うのであるが、それは全体が自由意思において(三)行われるように、全体が恩寵によって(ex)という仕方である。

(四八) 我々は、読者の賛成を得ていると信じている。なぜなら、我々はどこにも使徒の考えから離れておらず、またどの方向に話が脱線しても、その都度ほとんど使徒自身の同じ言葉に立ち帰っているのであるから。我々の言葉は使徒のかの言葉、「それゆえに、それは人間の意思や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによるのである」(ロマ九・一六)以外の何を述べているだろうか。じつさい、パウロがこう言うのは、

意志し努力することが出来る者は空しい、という意味ではなく、意志し努力する者は自分のうちではなく、彼が意志すること努力することをそこから受け取った方において誇るべきだからである。結局、パウロは言うのである、「あなたの持つているもので、あなたたちの貰っていないものがあるか」(一コリ四・七)と。

第一に創造、次に形成、第三に完成という神の三つの働きについて

あなたは創造され、癒され、救われる。ひとよ、これらの何があなた自身によってあなたにあるのか。これらのうちの何が自由意思にとつて不可能ではないか。存在しなかったあなたが自分を創造することは出来なかつたし、罪人であるあなたが自分を義とすることは出来なかつたし、あなたが死んだならば自分自身を蘇らせることは出来ない。癒しのために必要であつたり、救いのために設けられている他の善については省略する。我々の言うことの第一のことと第三のことに關しては明らかである。だが中間のことに關しても、神の義に無知で自分の義を立てようと欲し、神の義に服していない者以外は、誰も疑わない。それでどうだろう。あなたは創造する者の権能、救う者の栄光を知つておりながら、それで癒す者の正義を知らないのか。「私を癒して下さい。そうすれば私は癒されます。私を救つて下さい。そうすれば私は救われます。あなたは私の誉め称える方だからです」(エレ一七・一四)。彼は神の義を知つていた。そしてこの神によつて悲惨から自由にされると同じく罪から癒されることを等しく希望していたし、またそれゆゑに、自分の称賛(*laus*)を自分ではなく神にあると判断しており、それは正当であつた。このためにダビデもまた嘆息しながら言つた。「主よ、私たちにではなくあなたの御名に栄光を与えて下さい」(詩一一五・一)と。なぜなら、彼は神に正義の衣と栄光の衣の両方を期待していたからである。

自分を義とする者は神の義を知らない

神の義を知らない者は誰であるか。自分を義とする者である。自分を義とする者は誰であるか。恩寵以外の他の処から功績が自分にあると自惚れ思う者である。他方、救う対象を作つた者は、救いの根拠・原因をも与える。私は言う。功績を与える対象を作つた方自身が功績を与えるのだ、と。ダビデは「何を主に返そうか、全てに對するお返しに」(ヴルガタ詩一一五・三)と言うが、この「全て」は「主が与えて下さつた全て」ではなく、「主が私に報いられた全て」である。また彼は、存在していることも、正しい者であることも、主から来ることを告白しているのだが、それは、もし彼が兩者を否定したならば、彼が正しい者である根拠を放棄することにより、またそうすることにより存在することを非とすることによつて、両方を失つてしまふだろうから、そうならないためにである。だがもし、相互に報い返すべきものを第三の立場として見いだしたら、どうであろう。彼は言う。「救いの杯を受け取ろう」(詩一一六・一三)と。救いの杯とは、救い主の血である。それゆゑ、もし神の第二の賜物に對してあなたが報いるべきもので、あなた自身に由来するものは何もないならば、あなたはどうして自分に救いを厚くましく期待するのか。彼は言う。「私は主の御名を呼ぶ」(同)。それはむしろ、神を呼び求める者は、誰でも救われる(使二・二一)からである。

(四九)したがって、正しく知つてゐる者は、三つの働きがたしかに自由意思の働きではなく、自由意思自体において(*in ipso*)の、もしくは自体に關して(*de ipso*)の神の恩寵の働きであることを告白する。第一の働きは創造であり、第二の働きは再形成、第三が完成である。じつさい、我々は第一にキリストにおいて意思の自由に向けて創造されており、第二にキリストを通して自由の靈に向けて再形成され、次いでキリストと共に永遠性の状態に向けて完成さるべきである。まことに、存在しなかつた者は存在したかの方のうちに創造されねばならなかつたし、

形を失った者 (deformis) は形を通して再形成されねばならなかったし、肢体は頭と共にでなければ完成されるべきではなかったのである。このことは、たしかに我々みんなが完全な人間に、キリストの充ち満ちた年齢にまで達したとき (エペ四・一三) に完成するのであり、その時には我々の生命であるキリストが現れることによって、我々もまた彼自身と共に栄光のうちに顕わになる (コロ三・四) ののである。したがって完成は我々について、あるいは我々において、だが、我々によらずに、なされねばならないし、創造は我々なしでもなされたのだが、我々の意志的同意によってある仕方では我々と共に生じる再形成のみは、我々の功績になると判断されるのである。

意図と情動と記憶について

功績そのものとは、我々の断食、不眠、節制と憐れみの行いであり、またその他の諸徳の実践でもある。じつさい、それによって我々の内なる人が日に日に新しくされるということが成立するのである。――地上の心配によってペリヤンコになっていた意図も下界から少しづつ上方へと起き上がり、肉の欲求に関して無力である情動も、徐々に聖霊の愛へと回復し、また旧い働きの醜さによって汚れている記憶も、新しい善き働きによって真つ白にされて日々快活になるのである限り。あきらかに、これら三つの働きのうちに、すなわち意図の正直さ、情動の清浄さ、およびそれによって彼自身に自覚的記憶がよく輝き出す善き働きの回想 (recordatio) のうちに、内なる更新 (renovatio) が存するのである。

(五〇) まことにこれらは聖霊によって我々のうちでしばしば実行されるのが確かであるから、神の贈り物なのである。だがそれらは我々の意志の同意と共に行われるのであるから、我々の功績である。主は言われる。「というのも、語るのはあなたの方ではなく、あなたの方の内語るあなたの方の父の霊である」 (マタ一〇・二〇) と。使徒は言う、「あなた

方は私のうちでキリストが語っている証拠を求めるのか」 (二コリ一三・三) と。それゆえ、もしキリストもしくは聖霊がパウロのうちで語っているのであれば、おなじようにまた彼のうちで働いていないであろうか。というのも、パウロは「神が私を通して引き起こさないことは私は語らない」 (ロマ一五・一八) と言っている。それでどうなのか。もしパウロの言葉でも働きでもなく、パウロの内語りパウロを通して働く神の言葉であり働きであるならば、今やどこにパウロの功績があるのか。パウロがあれば大胆に確信をもつて述べていたことは、どこにあるのか。すなわち「私は善き戦いを戦った。行程を走り尽くした。信仰を守り通した。後は私に義の冠が取って置かれている。それはかの日に正しい審判者である主が私に返して下さるのである」 (二テモ四・七) ということは。彼は自分自身を通してそれらが行われたという点において、自分に冠が取って置かれると確信しているのだろうか。だが、多くの善が、天使にせよ人間にせよ、悪しき者どもを通して行われるが、彼らには功績と判定されない。では功績とされるのはむしろ彼自身と共に、すなわち彼の善い意志と共に、行われたがゆえであろうか。パウロは言う、「というのも、もしいやいやながら福音を宣べ伝えたとしても、それは私にゆだねられた職務である。だが欲して行うならば、それは私にとって栄光・功行・誇り (gloria) である」 (二コリ九・一六―一七参照) と。

(五一) それだけでなく、もし全ての功績がそれにかかっている意志自体も、パウロ自身によらないならば、どうして自分にとっておかれていると考えているものを義の冠と呼ぶのか。一体、無償で約束されたものは何であれ、債務として求められるのが正しいが故にであろうか。パウロが期待している冠は、パウロの義ではなく神の義の冠であること

結局、パウロは言う、「私は誰を信じたのかを知っている。そしてそ

の方が私の預り物(*depositum*)を保つことが出来ると確信している」(二テモ一・一二)と。神の約束を自分の預り物であると呼んでいるのである。それは、約束する方を信じたからであり、信頼をもって約束を要求するからである。約束はたしかに憐れみからなされたのだが、今や正義からして支払われなければならない。それゆえにパウロが期待しているのは義の冠であるが、自分の義の冠ではなく、神の義の冠である。たしかに正義(*justum*)は当然のものを返すことである。だが当然のものである(*debet*)のは、約束されたもの(*pollicitum*)である。また使徒が考えている正義(*iustitia*)は、神の約束であるが、それは——もし彼がこの正義を軽蔑して自分の義を立てようと欲するならそうなるのだが——神の義に従わないということにならないため(ロマー一〇・三)である。しかしこのパウロについて、神は彼を自分の義の協力者(*consors*)として持ちたいと欲したが、それは義の冠の功労者とせんがためであった。というのも、働き——冠はそれに対して再び約束された冠であった——の補佐人を得ようと決めたときに、神は彼パウロにおいて自分に義の協力者と冠の功労者を立てたのである。さらに、彼を欲する者、すなわち自分の意志に同意する者とした時に、彼を補佐人としたのである。したがって意志は(神の)援助(*auxilium*)に相應しいと、援助は功績に相應しいと、判断されるのである。それゆえ、もし意志が神から来たものであるならば、功績もそうである。また意志する働きも、善い意志によって完成することも、神によってであることは疑いない。それゆえ、意志を働きに結びつけ(*applicare*)、働きを意志に実現する(*explicare*)神は、功績の造り主である。なおまた、もし我々が固有な意味で我々のものというものが功績と呼ばれるのであるならば、それは希望の温床、愛の刺戟、隠された予定の目じるし、将来の幸福の予感、(神の)王国の道であるが、(神の)支配の原因ではない。要するに、神が義なる者と認め

た者たちではなく、神が義とした者たちを、神はまた称賛(*magnificare*)したのである。

以上は、本紀要二八巻に掲載したクレルヴォーのベルナルドゥス Bernardus Claraevallensis の *DE GRATIA ET LIBERO ARBITRIO* の残りの半分を翻訳したものである。

底本は、Bernardo von Clairvaux, *Sämtliche Werke lateinisch/deutsch*, Band I, herausgegeben von Gerhard B. Winkler, Innsbruck 1990 による。その他の参考書籍等も先稿に同じである。